THE DAILY NEWS
KOBE 2024 PARA ATHLETICS WORLD CHAMPIONSHIPS
Sun 19 May
DAY 3
Japanese

Yesterday's Highlight

初の予備予選が実施。熾烈な戦いに

神戸2024世界パラ陸上競技選手権大会の2日目も初日にひき続き晴天で風も穏やかで、陸上競技には最適の気象条件だった。週末の土曜日と重なり、会場にも大勢の観客が詰めかけ、温かい声援や拍手で、パラアスリートたちの挑戦を後押しした。そんな中、T11女子1500m（4分31秒77）とT37女子走り幅跳び（5m42）で世界新記録が樹立され、大会記録も多数更新された。

■ T47男子走り幅跳び

上肢障がいのクラスであるT47男子走り幅跳びが行われた。今大会、T47男子走り幅跳びには多数のエントリーがあり、17日、パラ陸上競技世界選手権としては初となる予備予選が実施された。6名が出場し、予備予選を突破した4名を含む、全16名が18日の本戦決勝に臨んだ。

本戦決勝では、前半3回の試技の記録によって上位8名が決勝に進出する。世界記録保持者で、東京2020パラリンピック、昨年のパリ世界パラ陸上の金メダリストであるキューバのロビエルヤンキエル・ソルセルバンテスのほか、東京2020大会、パリ世界パラ陸上の銀メダリストであるアメリカのロデリック・タウンゼントら世界のトップ選手が順当に決勝に駒を進めた。決勝となる試技4回目からは跳躍順は予選順位の8番からスタートする。予選試技2回目で7m60のビッグジャンプを見せたソルセルバンテスは、5回目、6回目の試技ではファウルとなり、予選の記録のまま優勝した。

「今日は自己ベスト、つまり世界記録更新が目標だったので、記録には満足していないが、昨年に続き世界選手権2連覇できたことは嬉しい」と、ソルセルバンテスが語った。左足の内側くるぶし付近にかすり傷を負って本調子ではなかったことが、好記録につながらなかったと振り返る。17時5分からの競技にはメインスタンドに多くの観客が集まり、手拍子で選手を応援した。「予選試技の1本目から最終試技まで、私だけでなく多くの選手に温かい手拍子があり、競技がとても楽しめた」。

日本の芦田創は、試技１回目に6m53の記録を出したが、２回目、３回目にファウル、決勝には進出できず最終結果は11位だった。

■T64男子走り高跳び

ひざ下にまひなどのあるT44とひざ下切断により義足を使うT64のクラスが混合で実施されるT64男子走り高跳びには東京パラリンピックや前回パリ大会のメダリストなど9名が出場した。競技はバーの高さ1m72から開始され、バーが1m77、1m82、と上がっていく中、3回続けて失敗した選手が一人ずつ減っていく。

息詰まるサバイバルレースがつづくなか、バーは2m01まで上がり、跳び越えた3人のメダル争いとなった。2m04の1回目、東京パラリンピックと前回大会を制したT44のジョナサン・ブルームエドワーズ（イギリス）は軽々とクリアしたが、残る2人はともに2回まで失敗。プレッシャーのかかる3回目をT64のデレク・ロクシデント（アメリカ）が先にクリアしたが、前回金メダルでT44の世界記録（2m19）をもつマチェイ・レピアト（ポーランド）はミス。先に2m04をクリアしたブルームエドワーズが暫定1位に、3回目の試技でクリアしたロクシデントが2位となった。ブルームエドワーズとロクシデントは2m07に挑戦するもクリアできず、そのままメダルの色が決定した。

王座を防衛したブルームエドワーズは、「私の大好きな国の一つである日本で勝てて、とても嬉しい。今日はクリーンなジャンプを続けられたし、負けることなしに今年最大の目標であるパリパラリンピックに向かっていける。それに今日は、この種目に新しい顔ぶれが入ってきてくれたことも嬉しい。本当に素晴らしいことだ」と選手層が厚くなり種目が広がっていくことを、王者は喜んだ。

「新しい顔ぶれ」という一人は銀メダルを獲得したロクシデントだ。走り幅跳びを専門としていたが、今年から走り高跳びにも挑戦し始めたばかりという。2018年に電車事故で左脚を切断し、義足で競技するが、アメリカンフットボールなどで鍛えた持ち前の身体能力で自己記録を12cmも伸ばし、T64の大会記録も12cm塗りかえたほか、2位までに与えられるパリパラリンピックの国・地域への出場枠も獲得した。

「喜びで胸がいっぱい。初めての日本だったが、人々が笑顔で迎え称えてくれて感謝している。応援が僕を奮い立たせてくれた」と満面の笑顔とジェスチャーで喜びをあらわした。

今大会は走り高跳びに加え、専門の走り幅跳びと100m、さらにやり投げにも出場するという。「短い競技人生を最大限に活用したいし、障がいの有無に関わらず、次の世代にインスピレーションを与えたいと思っているんだ」

なお、日本の鈴木徹は1m77で9位だった。「踏み切りのタイミングが修正しきれず、今日はいい跳躍ができなかった」と唇をかんだ。自身7回目となるパリパラリンピック出場を目指しているベテランは今年限りでのパラスポーツからの引退も示唆したが、数少ないT64の選手としてこの種目を牽引してきた鈴木もまた、ロクシデントの活躍を喜んだ。

「T44の選手が増えるなか、僕はずっと義足で跳ぶことにこだわってきたが、今日、新たなスターの出現を見られて嬉しかった。義足のジャンパーを引き継ぎ、T44の選手たちといい勝負をしていってほしい」とエールを送った。

Competition Schedule and Results

GO KOBE 2024!

次世代型ユニバーサルステアリングに人気集中

メインスタンドの外、メダルプラザ周辺には大会スポンサーによるイベントブースが設けられている。その中の一つ、トヨタのブースが人気だ。会場入り口付近に展示されているランドクルーザーにたくさんの人が集まっている。

ランドクルーザーに搭載されているのは、NEOSteer（ネオステア）という最新のステアリングシステムだ。車いすユーザーが手だけでアクセル、ブレーキ、ハンドル操作ができる装置で、従来の福祉車両だけでなく一般車両の常識をも覆す、画期的な機能を備えている。トヨタ自動車　クルマ開発センター　ボデー開発部の福住泰彦氏によれば、「一般的なクルマでは、丸いハンドルを回して、足でアクセルとブレーキを踏み込む形になっていますね。ネオステアは、アクセルとブレーキをハンドル部に搭載して手で操作できるようになっています。また、一般的な丸いハンドルの場合、コーナーを曲がったり駐車したりする際に、ぐるぐると２回転半ほどハンドルを回さなくてはタイヤをいっぱいまで動かすことができませんが、ネオステアではアクセルとブレーキを操作しながら、90度程度ハンドルを切るだけでタイヤをいっぱいまで回すことができる。これが大きな特徴です」。

ネオステア開発の発端は、パラアルペンスキーで2006年トリノパラリンピックから５大会連続でメダル獲得している森井大輝選手と、豊田章男会長との会話だったとか。「手動式の運転装置をつけた僕のランドクルーザーを見ていただいた時に、僕が片手でハンドル操作をするため不安定になるとお伝えしたら、会長が“バイワイヤ”だなと、お話されたんです」（森井選手）。

バイワイヤは、機械的機構による経路ではなく電気信号によってステアリングやアクセル、ブレーキを操作する運転支援システムのこと。このテクノロジーを応用して、車いすユーザーである森井選手が日常的に不安を感じていた運転操作を画期的に変えるシステムの開発に乗り出したのだった。

今大会のイベントブースでは、ネオステアを搭載したランドクルーザーの展示だけでなく、実際に操作を体験できるシミュレーションも併設されている。シミュレーションでは、運転免許を持っていない子どもでもゲーム感覚で体験できるため、大会初日から行列ができていた。展示されていたランドクルーザーでは、今大会に集まったパラアスリートが興味津々でシステムの説明を受けている。

ブースのある場所とは別に、実際にネオステアを搭載した車を試運転できる会場もあり、障がい者を対象に予約制で体験するコーナーも設けられている。また、ブース付近では、日常の歩行をアシストする電動のモビリティもあり、これも試走の順番待ちの列ができていた。

会場でランドクルーザーに集まったパラアスリートらに熱心に解説する森井選手は、「さまざまな障がいのある人が、このシステムに共感し、さらにアイデアやヒントをくれる。健常者も障がい者も楽しめる新しいステアリングシステムは、福祉車両の新たなムーブメントになるのではないかと思っています」と、語ってくれた。

、